

博士論文要旨

学籍番号 1218001	氏名 中島真由美
論文題目	外来通院する働く世代のがん患者への看護に関する研究
<p>目的：本研究は、外来における働く世代のがん患者の看護の課題を明確にし、看護の改善方法を検討、実施することで、生活上の様々な困難を有する働く世代のがん患者に対する外来における看護の在り方を検討することを目的とする。</p> <p>方法：研究Ⅰでは文献調査および、地域がん診療連携拠点病院 A 病院の外来における働く世代のがん患者と看護師、MSW への調査より外来における働く世代のがん患者への看護における課題を明確化した。研究Ⅱでは、A 病院の内科外来における働く世代のがん患者への看護の改善方法の検討と実施を行った。研究Ⅲでは、研究Ⅱへの評価に関する外来看護師への調査と患者への看護の結果より外来における働く世代のがん患者への看護の評価を行った。</p> <p>結果：【研究Ⅰ】患者は、仕事や治療、家族や金銭面への困難を抱えながら通院していた。看護師と MSW への調査結果より、いかに自立して生活する外来通院する働く世代の患者の困りごとに気づき、情報を得て必要な看護を検討するかが外来における課題としてあげられた。【研究Ⅱ】外来において、働く世代のがん患者 3 事例への看護を行う中で、外来における看護を検討した。その結果、実施していた看護の内容から外来看護の方針として《①支援が必要と判断した対象乃外来受診時、診察後 STAS-J を入力する。②外来受診時には、外来診療に同席するか、待合で声をかけ様子を確認する。難しい場合は、MSW や認定看護師の協力を得ることも検討する。外来での様子は SOAP 記録を記載して残す。③診察後、受け持った看護師と今後の関わりの方針を検討するカンファレンスを開く。検討する際に、関わりの視点を参照し、必要な支援を検討し看護計画を立案する。カンファレンス記録を残す。④次回受診時、検討した方針に沿った支援を行う。⑤③戻る》として整理された。また、外来における働く世代のがん患者へ関わる際の視点として、身体的苦痛と治療内容の確認、外来がん診療に関わる認定看護師や MSW などとの連携と情報の共有、病状の進行に伴う本人の心理面の変化への配慮と感情表出の促し、家族背景の確認と家族の心理面への配慮、在宅診療科や緩和ケア病棟、訪問看護ステーションなど他部門との連携、自宅での療養環境の整備の必要性の確認と必要時調整を意識して取り組んだ。【研究Ⅲ】3 事例の取り組みを行った結果、外来において看護を実践することが難しいと考えていた看護師が、看護を実践している実感を得ていた。また、働く世代のがん患者への看護を通して、がん患者への看護の必要性が確認され、外来看護師が協力し多職種連携して患者を看護する風土が養われたと評価された。</p> <p>考察：働く世代の患者はがんの進行度にかかわらず、自身の療養以外にも様々な困難を抱えていることが多く、外来においても働く世代のがん患者の様々な心理社会的問題をアセスメントした上で看護することが必要である。外来におけるカンファレンスにより患者への支援を検討し実施することは、外来看護師が看護を考え表現する機会となり、看護を行っているという実感に繋がった。また、外来受診の機会を捉えた患者への看護を、外来看護師によるチームが継続して行える体制を整えることが、外来看護の充実につながると考えられた。外来においては、[正規職員が少ないことによる難しさ]や[病状の進行が早いと支援のタイミングが難しい][患者、家族別々に支援することが難しい]などの課題があり、さらなる検討の必要性が示唆された。</p>	

(別記様式 7)

番 号 :

令和 5 年 2 月 15 日

令和 4 年度博士論文審査結果報告書

主 査	松下 光子
副 査	奥村 美奈子
副 査	北山 三津子

令和 4 年度博士論文の審査及び最終試験を実施した結果は、下記のとおりです。

記

学籍番号 : 1218001

氏 名 : 中島 真由美

審査結果 : 1. 合格 2. 不合格 3. 保留

[審査結果要旨]

(1,000 字以内)

論文題目「外来通院する働く世代のがん患者への支援に関する研究」は、外来における働く世代のがん患者の看護の課題を明確にし、看護の改善方法を検討・実施することを通して、生活において様々な困難を有する働く世代のがん患者に対する外来看護の在り方を追究した研究である。

まず、文献調査 (23 文献) より外来通院するがん患者への効果的な支援を 2 項目明らかにした。次に、外来看護の課題の明確化のために、外来通院するがん患者、看護師及びメディカル・ソーシャル・ワーカーに調査を実施し、課題として「いかに自立した生活をする外来通院する働く世代の患者の困り事に気づき、情報を得て必要な看護を検討するか」を導き出した。学生は外来看護師と課題を共有し、課題解決方法の検討を重ねた結果、外来看護体制の実状を踏まえ、既存の問診票を活用した患者把握と共有、外来看護計画に基づく実践と記録の一連を繰り返し実施することを「外来看護の方針」として決定した。方針に修正等を加えながら 3 事例に取り組んだ結果、問診票の記入やカンファレンスが確実に実施され、患者のニーズを捉えた看護実践が促進された。また、看護師は外来で協働して看護する風土が醸成されたと評価した。以上を通じて、外来では看護師が限られた機会を逃さず患者に関わろうとする意識が重要であり、カンファレンスにおける看護の検討が看護師の意識を向上させ、実践の変化に繋がると考察している。

以上の過程は的確にデータ化され、論述されており、働く世代のがん患者の看護及び外来におけるがん患者への看護の充実に貢献する研究として高く評価する。審査委員会では、これらの取り組みは本研究科の倫理基準に基づいて実施されており、論旨が明確で一貫性があり、博士論文審査基準に適合するものであることを確認した。

当該学生は審査委員会に 3 回出席し、主査・副査からの質問に答え、かつ直接指導を受け、最終試験に合格した。

以上のことから、本論文は博士論文として価値あるものと認める。